

京都橘大学女性歴史文化研究所 第二八回シンポジウム

「近代ヨーロッパにおける女性の社会進出 ―イギリスとフランスの事例から―」Ⅲ

討 論

【渡邊】

それではパネル・ディスカッションを始めたいと思います。質問が出るのかどうか心配でしたが、二〇件以上もたくさん頂戴しました。ありがとうございます。逆に、終了時間までに回答できるかが心配になつてきています。できる限りお答えして、進めさせていただこうと思つています。

きょうは、松田先生にフランスの初等教員を通した社会進出についてお話ししていただき、二番目に松浦先生からイギリスのヘルス・ヴィジターについてご報告いただきました。対象とした職業が違つていますので、まず最初に、フランスで保健師とはどんなものだったのか、イギリスで初等教員はどんな状況にあったのか、概略も含めて簡単にコメントしていただければと思います。

【松田】

保健師についてはあまり詳しくありませんが、少しだけ見聞きしたことをお話しさせていただきます。

フランスの場合、もともとボランティアであつたことは確かですが、それは修道女が担つていました。教師もそうですが、看護師や工場の福祉担当者などが合わさつて、もともとフランスでは保健師（アシスタント・ソシアルという名称がついています）は修道女だつたということがあります。そこが少し違うかなという気がします。

私がえつと思つたのは、男女が一緒に働いている写真です。フランスの場合、プシコーという女性が「ボンマルシェ」という最初のデパートをつくつたのですが、その絵を見ると、働く場所も食堂も通信販売部門も男女で分かれていきます。銀行も、女性行員は階段も別でした。ですから、イギリスとは違うなというイメージを持ちました。

フランスでアシスタント・ソシアルのようなものが制度化されるのは第一次世界大戦後ですので、やはりイギリスのほうが早かつたことになりました。そして、イギリスのものをお手本にをつくつたようです。看護師とヘルス・ヴィジターが一緒になつたということです。フランスの場合は、看護職とアシスタント・ソシアルがまったく別個の存在になつていったところが少し違うかなという気がします。

た。

【松浦】

ご質問、ありがとうございました。日本とヨーロッパを比較できたらよかったのですが、今回はイギリスとフランスのはほぼ同時代を比較しながら、まったく違う職種を取り上げましたので、話もまったく違つて、少し面食らわれたかと思います。それで比較が難しかったというのですから、私からもイギリスの小学校教師の話をさせていただきます。

フランスに比べれば、男性と女性が同席して、同じ学校の男性教師と記念写真があり得たという点などは違うのかなと思います。ただ、フランスもイギリスも公教育制度が始まるのはほぼ同時期の一八七〇年代で、じつは日本の学制もほぼ同じです。しかし、その前史がかなり違うのかもしれない。

イギリスの場合は、一九世紀半ばには、公立の学校はなかったのですが、ヴォランタリー・ソサエティーが運営する学校が各地につくられています。イギリスにも少数ながらカトリック信者は居ましたので、彼らは自分たちの学校をつくっていて、修道女が教えるということがあります。しかし、基本的には、カトリックではなくプロテスタントの国なので、教会が直接に教育に携わる（牧師が教師になる）ことはあり得ません。また一般的には修道女がいませんので、修道女が教えることもあり得ません。ですから、教会の息はかかっているのですが、学校組合というのでしょうか、「〇〇ソサエティー」と呼ばれるもの

が誕生し、そのソサエティーが寄付金を集め、そのお金をもとにして各地に学校をつくっていき、その教員も独自に養成するというシステムを採りました。

誰が教員になるかという点、最初はお金を出した組織のメンバー（中流階級以上の人たちが）が庶民を教えていたのですが、すぐに、その学校で学んでいる子どもたちのなかから、最終学年まで進んだ出来のいい子を教習生に選び、その子が卒業する前に小学校で教えさせるのです。教えると同時に、その小学校の先生に放課後、指導を仰ぐというまさに教育実習生のようなたちで、だいたい二年間ぐらい過ごします。そして試験を受けて、それに合格すると奨学金を得て師範学校に行きます。そこで二、三年を過ごして、最後の試験に合格すると正式の教員免状が取れる、というようなシステムです。

要するに、小学校の教師になる者は小学校の出身者から優秀者をピックアップするというシステムでした。中流階級以上の家は、家庭教師に学ぶのが原則で、小学校には入りませんから、小学校そのものが労働者向けです。したがって、小学校教師は中流階級以上の女性たちの進出する職ではなかったのです。

イギリスの場合、公教育制度が発足しても、学校教師は国家公務員ではなくて、地方ごとにできるスクールボードという学校委員会が運営する学校の教師という立場を採りますが、公務職ではありません。公教育制度が誕生し、この公務職になったことで、下層の中流階級の家の子どもたちが小学校教師をめざすようになります。冒頭に「イギリスは階級社会だ」と申し上げましたが、階級制が学校制度にも色濃く

出ている、どこの教員になるかは最後まで分かれていたように思います。

そこはフランスとはかなり違うかもしれませんが、フランスの場合は、何度も革命を経験したのが一九世紀です。ところが、イギリスは、「革命」と名のつくものは一七世紀に経験したきりで、一九世紀になっても相変わらず貴族はいるし、地主はいるし、イギリスの土地のほとんどは地主の持ち物で、一般庶民には土地の所有権は現在もありません。すべて土地の保有権でしかない。それがイギリスという国です。

それがいろいろなところに現れてくるのですが、階級制度の温存・残存というかたちで現れていて、教育も完全に複線型です。中流階級以上の子どもたちが学んでいく学校のルートと、労働者階級の子どもたちが学んでいくルートは、完全に分かれていましたし、現在でもほぼ分かれています。もしかしたら、そこがフランスと違うし、誰が教員になるのかも違うのかなと思います。

【松田】

教育が複線型というのは、フランスも同じです。

【渡邊】

それでは、たくさんのご質問をいただきましたので、類似の質問はまとめてお答えをお願いいたします。お二人に共通の質問も来ていますので、最後にそれにお答えするという手順で進めようかと思っています。

ます。

【松田】

まず、「上流階級、あるいはブルジョワジーの女性」という言葉がありますが、「上流階級」「ブルジョワジー」の位置付けや定義は何か、どの基準から上流・中流階級なのか、「ブルジョワジー」という言葉に定義はあるか、というご質問です。「ブルジョワジー」の定義は非常に難しく、そもそもブルジョワというのはブルグという都市の中に住んでいる人たちが語源ですが、それが「市民」といった意味になっていくわけです。この時代のブルジョワジーというのは、もともとブルジョワジーに生まれたからブルジョワというのではなくて、みんなから「あの人はブルジョワだ」と思われたら、「ブルジョワ」と呼ばれることになります。では、それはどんな人なのかというと、たとえば客間があるとか、召使を雇っているとか、ブルジョワらしい家に住むとか、そういうことが「ブルジョワ」と認められるような条件になります。

女性が働かないというのも、女性が働かなくても生活できるような身分になったということで、ブルジョワと認められるようになります。

この時代には、工業が発展して、いろんな人が都市に入ってきて、都市で商売をしたりして、お金持ちになってブルジョワらしい生活ができるようになったら「ブルジョワ」と呼ばれるようになりました。ですから、新しく「ブルジョワ」になった人もいます。そういう人たちは、女性が働かないことも周囲から「ブルジョワ」と思われるひとつ

の条件ですから、貧しくなってしまうと、たとえば掃除も自分でしなければいけないとなると、見えないところで掃除を何とかしました。召使が少なくとも一人いることもブルジョワの条件ですから、召使がいなかった場合は、招待会を開くときだけ家政婦さんに来てもらおうとか、そんなこともブルジョワの条件になります。

【渡邊】

イギリス史におけるブルジョワの定義について、補足的なコメントがあればお願いします。

【松浦】

「ブルジョワ」はフランス語で、それをイギリスに当てはめるために、私は先ほどから「中流階級」という言葉を何度も使いました。英語で言う「ミドルクラス」です。ミドルですから「真ん中」ですが、なぜミドルと言うかというと、伝統的な支配階級である上流階級は、地主階級（イギリスで本当の意味での土地の所有権を持つのは貴族と地主にあたり、いわゆる爵位を持っている人たちと、爵位はないけれどもサーの称号を持っている人たち、そして、サーの称号もないけれども広大な土地を所有している人たちが形成しています。いわゆるアツパークラスであり、自分たちのことをジェントルマンと言っています。下には、働かなければ生きていけない労働者階級があり、その中間にいるのが中流階級ということになります。

中流階級が明確に見えてくるのは、イギリスの場合、産業革命以降の一九世紀ですが、ほぼ松田先生のおっしゃったことと近いです。中

流階級は、男たちは工場や会社を経営するというかたちで自ら働きませんが、その妻や娘は働きません。つまり、女性は働かないということと労働者階級との区別をつけるわけです。働かないということは、経済労働をしないだけでなく、家事や育児労働からでもできるだけ遠ざかるので、サーバント（女中）を雇うことが必須になります。最低でも一人のサーバントを、それも住み込みのサーバントを雇って初めて中流階級である、という感じです。

サーバントを雇えるかどうかは経済力ですから、身分・出自は関係なく、まさに経済力によつて自分はミドルクラスであると世に宣言することもできるし、自覚することもできます。したがって、中流階級の女性は、働かない代わりに夫や父親の経済力を世に誇示すること、ひけらかすことを任務にしていたと言われています。

ヘルス・ヴィジティングの内容については、私の時間配分がまずくて、あまり触れていません。簡単にいえば、ヴォランティア時代のヘルス・ヴィジターは、貧しい人びとの地区の中に住まいを確保して、そこで毎日、周りの家を訪ねて歩くのです。普通に友だちのような感じで話しかけて、その話しかける内容が基本的な衛生知識・情報であったと言われています。

たとえば、「窓を開けましょう」と話しかけ、新鮮な空気がいかに重要かという話をしてあげます。また、手や体を洗うことがいかに重要であるかも話してあげます。そんな基本的なことから始まって、「肌には呼吸をするための穴が開いているから、皮膚の清潔がとても重要だ」というふうに、だんだん衛生的な知識を話してあげていまし

た。

公務職になつてくると、自分の担当地区の家を毎日のように回つて、衛生情報の普及や教育をするというよりも、現在の訪問保健師に近いでしょうか、子どもが生まれた家を訪問して、生まれた子どもの状況をチェックし、正しい育児・授乳の仕方を指導したり、マザースクール（母親学校みたいなところ）に来るように勧誘するといった仕事が多くなつてきます。と同時に、保健医官の指導の下にありますので、保健医官の求めるところ、つまり乳幼児の死亡事件が起こつたらその家にすぐに行き、なぜ子どもが死んだのかとプライベートにかなり立ち入つて、その死亡原因について調査をします。多くの場合は伝染病の可能性もありますが、たとえば激しい下痢が続いた結果子どもが衰弱死をしたら、乳幼児の死亡原因としてそれが報告されます。そうするとなぜ激しい下痢がずっと続いたのか、その家の母親の食物管理がなつていないのか、家そのものが不衛生なところにあつて、どうしようもないのか、使われている水はどうなのか、ということをチェックすることになります。

当時、「子どもが死ぬのは母親の責任である。労働者階級の母親は無知で、子どもに対して無関心である者が多い」という見方があり、そういう母親に対して、あるべき母親の姿を徹底的に教えてあげる存在として、ヘルス・ヴィジターは位置付けられていました。

ですから、帝国主義の時代に、労働力や後の兵士になる人間を確保するという人口問題が関わってくると、ヘルス・ヴィジターとして労働者の家を訪問して、母親にあるべき子育て方法や食事を教える仕事

が一層重要視されるようになりました。

同時に、先ほど述べましたように、子どもの死に関わる調査やある種の査察のようなこともヘルス・ヴィジターにさせるという方向になったのです。それで、サニタリー・インスペクターとヘルス・ヴィジターが奇妙なたちで交錯することになったのだと思います。

国家はどのように関わっていたのか、地方が主導していたのかということについては、衛生関係の仕事は地方の公共団体（市や州）の管轄業務であつたために、基本的に各市・各州が先導してヘルス・ヴィジターなりサニタリー・インスペクターを任用しています。それが国の法律によつて正式に職員として認められれば法定職、そうでなければ非法定職で、サニタリー・インスペクターはかなり早い一八七二年に法定職になりますが、ヘルス・ヴィジターが法定職になるには一九二九年まで待たなければならなかつた、ということをお伝えしておきます。国は、地方で進んできたことを、最終的に法律によつて承認する立場であつたと言えるかと思っています。

【松田】

次のご質問は「フランスの初等教育の男女の就学率の差はなかつたのでしょうか。女性は就学率が低いとするならば、それによつてその後の女子師範に進む率や数に違いがあるのではないかと思うのですが」というものですが、全員義務教育なので、就学率に男女の差はありません。ただ、中等教育になると男子のほうが多くなります。ところが、女性の高等教育に進む割合がだんだんと高まり、現在では大学

進学率は女性のほうが高くなっています。

教師に関係することでは、「アルジェリアやチュニジアなど北アフリカの植民地に教師が派遣されることはあったのでしょうか」という質問をいただきました。イギリスは『海を渡った女性教師』という本が出ているぐらい行っていたと思いますが、フランスの場合、そもそも海を渡る女性が非常に少なかったと思われますので、もしかしたらあるかもしれませんが、私の知る限り、この時代にはないと思います。(補足と訂正*)

「スポーツを教える教師はどのように育成したのでしょうか」という質問ですが、師範学校には体育の授業もありますので、体育をちゃんと学んで、それを教えていました。そもそも教師が一人しかいない学校が多かったので、全科目を教えていたことになります。

次は「世俗の修道女の手紙を教えてください」ということですが、はつきり覚えていませんが、おそらくスールまたはルリジューズ・ライク (soeurs, religieuse laïques) だと思います。男子のほうはユサール・ド・ラ・レプブリク (husards de la République) だと思います。うちろ覚えなので、違うかもしれません。

教職に関する質問では、日本の制度との違いというか、日本の場合に触れていたきたいというのですが、これについては私もよく存じませんので、お答えできません。

「女性教師のイメージがどうして悪いのか。公教育が整った後も偏見が残っているのか、日本の場合はそんな偏見はなかったように思いますか」という質問ですが、きつちりとした公務員という立場にな

りますので、偏見は徐々になくなっていくます。

ただ、私が紹介した時代は、まだ変わったばかりですから、もともと持っていた偏見があつたわけです。そもそもブルジョワ階級の女性が働くことへの偏見もまだ残っていました。しかし、第一次世界大戦が終わった頃になると、だんだんと偏見もなくなり、女性が働くことを認めるようになっていったと言えます。

*『政治文学年報』に寄せられたフランシスク・サルセイへの手紙の中にオラン県(現在のアルジェリア)の男性教師からの手紙があります。したがってアルジェリアにも教師が派遣されていました。

【松浦】

先ほどご紹介し忘れたのですが、「回っていた労働者の評判はどうだったのか」という質問がありました。ヴォランティア組織によってヘルス・ヴィジティングが行われている間は、「自分たちと同じ仲間の女性たちがやって来ているんだ」という感じで、けっこう定着していたという説もあります。しかし、公務員になり、中流階級の女性の職になってくると、そこに階級差が生じて、やはりインスペクターではないにしても強圧的な存在として、ヘルス・ヴィジターに対する拒否感が出てきたのではないかと言われています。でも一方で、二〇世紀になってから活躍するヘルス・ヴィジターたちは、ソーシャル・ワーカーの役割も果たすことになりましたし、救済活動にも関わり、看護師的な活動もするようになり、徐々に市民社会に受け入れられていったとも言えます。

ただし、ヘルス・ヴィジターは、その役割が徐々に子育てに関する衛生教育（赤ちゃんが下痢で死んでしまうことのないように等）から変わっていきます。時代が進むと、イギリスにおいても衛生環境は急激に改善して、そういう理由で子どもが死ぬこともなくなるからです。

代って、子育てに関わる専門職として、専門職であるための立脚点を子どものメンタルヘルスの問題へと置き換えていきます。いわゆる道徳的に正しい子・良い子に育てるためには、母親はどうあるべきか。それを指導する役割を担うことになるのです。もともとつとプライベートな部分に介入していく職になっていったとも言えます。

いわゆる先進医学という学問的権威を背負って母親の指導に当たるようになると、労働者階級に対する指導だけでなく、中流階級まで含めたすべての母親に対する教育・指導者がヘルス・ヴィジターである、というふうになっていったことを付け加えさせていただきます。そうなつてくると、母親として自信のない女性にとってはありがたい助言者になりますが、多くの場合は介入者というふうに見られていた部分も確かにあります。

もうひとつ、フェミニズムに関する質問をいくつかいただいています。たとえば「社会的疎外からの解放を、中流階級の女性たちは自然発生的に考えたのか。誰か啓蒙する立場の人はいたのだろうか」というご質問、あるいは「女性は結婚するとさまざまな法的権利を失うという話だったが、なぜ権利がなくなってしまうのか」「地位の向上ということであれば、医療関係以外にも女性の地位を向上させたものがあるのか」というご質問をいただきました。

地位の向上ということであれば、やはり女性教師は女性の地位向上の役割を果たしたと思います。小学校教師は労働者階級の女の子がなるといふ話をしましたが、中流階級の女の子たちは中等教育が展開して最終的に大学に進むので、中等教育機関、つまり女学校の教師としての職を確かなものとし、そうすることで社会的な貢献や社会的な地位を確保していった、というのが一九世紀にみられると思います。

そして、女子教育改革の成果として、大学の門を無理やり開くのですが、そうやって大学で学ぶようになった女の子たちが、たとえば医学や法学の世界に進出していくのは一九世紀末から二〇世紀初めぐらいです。公務員も、国家公務員として働き、行政官としても名を馳せる女性たちも出てくる、ということもありました。ですから、やはり教育ということが大きいと思います。

それから、労働者階級の子どもたちが小学校で学び、そのなかの優秀な子どもは選ばれて、小学校教師になっていきますが、もつと優秀な子たちには奨学金があります。イギリスは奨学金制度が発達しています。ただし、誰にでも与えられる奨学金ではなくて、非常に激しい競争試験があります。試験に合格すると奨学金が得られ、上級学校に進むことになります。

公立の小学校ができて、すべての女の子たちが学校で学べるようになり、優秀な子は「奨学金をめざせ」と周りから発破をかけられます。奨学金を得られたならば、本来なら中流階級の子しか行けないような女学校に進みます。そこを卒業したときに、中流階級の子が就くような職をめざす場合もありますし、さらに奨学金を得て大学に進む女の

子たちもいます。

そういう子たちの伝記や日記を読むと、自分が親たちの労働者階級文化からどんなかけ離れていくことを自覚しています。付き合う人たちも、親の周りにいた人たち、つまり自分の生まれ育ったところにいた人たちは全然違う人たちになっていきます。女学校に行けばそうですし、さらに大学に行こうものなら本当に上流階級の人たちと付き合うようになり、貴族の家のガヴァネスになったり、女学校の校長になったりして、最終的に「私は親から離れてしまったのだ」ということを言います。

ですから、小学校からずっと上がっていくというのも、地位の向上というか、身分の向上になる、というのはあつたと思います。

フェミニズム関係についてまとめてお話ししますと、「なぜ女性性は結婚すると公的権利を失うのですか」ということですが、イギリスの場合はコモン・ローと言いまして、中世以来ずっと生き残っている慣習法があります。古代ローマ帝国が滅びた頃のヨーロッパ全土に広がっていたゲルマン人が、部族ごとに分かれていたときの部族の掟がそのまま生き残り、慣習（つまり掟が法律として残ったのです。後に議会で制定法という法律がつくられて、慣習法はかなり置き換えられていきますが、じつは一九世紀になってもコモン・ローはまだ生きていました。

そのコモン・ローの掟、つまり古代・中世以来のゲルマン人の掟です。女・子どもは男の財産という扱いになるわけです。結婚すれば、女性はずべての権利を失い、言い方は悪いですが「夫の持ち物」

という扱いになっています。それを徐々に徐々に変えていこうというのがフェミニズムということになります。

「フェミニズムは指導者がいたのか」というご質問にお答えするのは、たいへん難しい。思想的な源泉についてはメアリ・ウルストンクRAFTなどの名前がりますが、たとえば最初の女性の権利の獲得は、ある上流階級の女性が子どもから引き離されて悲痛な叫びをあげたことにはじまります。母性礼賛と言われるのに、夫と別居生活になると、女性は親権がないから、子どもは夫のものになり、子どもに会うことができない。それがいかに理不尽であるかということ、じつはこの人は女流作家でもあつたので『パンフレット』に書いて、世の中に発表する。そうすると同情の声が集まって、いろいろあつて法律が変わり、女性は、親権ではありませんが保護監督権を獲得することになります。

最初はそんな個人的なことから始まって、その悲痛な叫びに対し、中流階級の女性のなかから「彼女を支援しなければならぬ」という動きが出てきて、たとえば女性に関する法律の解説書が出版されます。それを出版した人たちが最初のフェミニスト、フェミニズム運動の指導者グループを形成しました。そして彼女たちが拠点にしたのが『イングリッシュ・ウーマンズ・ジャーナル』誌です。いわゆるフェミニストの機関誌と呼ばれるような雑誌を通じて、世の中にそれを啓蒙していくというのがひとつです。

もうひとつは、現実には結婚できなくて自立・自活をしなければならぬ女性たちの職業としては教員（ガヴァネスか学校教師）しかなかった

わけですが、職業獲得に結びつく教育改革を進める運動もぐっと展開していきます。この二つがフェミニズム運動の柱であり、やはりリーダー格になる人たちがいて、雑誌を通じて社会に対して発信していたというイメージでしょうか。

【渡邊】

個別の質問をあと一問ずつ、手短にお願いします。

【松田】

どうして女性の権利がなくなっていくのかという質問については、フランスの場合、近世から近代にかけて権利はどんどんなくなっていますが、結局、ナポレオン民法でそれが法律的に規定されてしまうということです。ゲルマン法の話が出ましたが、ナポレオン民法はローマ法と関連があります。ナポレオンはローマ法を真似たと言われているからです。なぜナポレオンはそうしたかというと、家族制度、家族の秩序を非常に重視したので、「家長がいて、それに従う人たちがいる。父親・夫がいて、女性はそれに服従する」というようなことを言っています。ですから、それに対して一九世紀の女性たちは闘ったということがあります。

フェミニズムについては、フランスの場合も、フランス革命のときには女性が活躍したということもあります。たとえばオランプ・ド・グージュという人は「人権宣言」に対して「女権宣言」を出しています。そういう人もいますが、それがそのまま後の時代にまで継承され

るわけではなく、むしろ女性に対する抑圧が強くなる傾向が見られますし、フェミニズムがそのまま盛んになるということもないのですが、一九世紀になって、イギリスの影響などもあって、フェミニズム運動が盛んになります。

しかし、フランスの場合は、イギリスや北欧諸国とは違って、「私たちは女性らしさを保ったままフェミニズムをやるんだ」ということで、イギリスでは参政権運動のときには爆弾を投げたりすることがありましたが、そういうことはしないとされています。

「一九世紀後半における女性の軍隊と女性の社会進出の関係」ですが、たしかに戦争のときに女性が、いなくなった男性の代わりになんなしごとにくさん就いたということはあります。たとえば鉄道の運転手になったり、工場長になったり、以前は女性には認められなかったのにだんだんできるようになったということはあります。しかし、フランスの場合は、戦争が終わったら「もう要らないから元に戻ってください」という感じで、少しは増えるのですが、なかなか男性と同様になるまでは至っていないということがありました。

【松浦】

イギリスでも、第一次大戦中、出征した男子の労働力を女性が代替するダイリリューションと言われる現象とその反動があったことは知られています。おそらく一緒だったのだらうと思います。

軍隊と女性ということで言うならば、軍隊に女性が入ることは正規の軍隊になってからはあり得ないことでした。それはずっと後の話だ

と思います。ただ、強いていえば従軍看護師、軍の中の医療部門における看護職については、一九世紀の末か、もしかしたら二〇世紀の初めだったかもしれませんが、正規の女性看護師が軍の医療部隊の中に任用されています。

つまり、看護ですら女性はいなかったのです。クリミア戦争で、ナイチンゲールが野戦病院に看護団を連れて行って云々というのは、連れていかなければ、そこに看護師はいなかったわけで、イギリスの軍隊にいわゆる看護師はいなかったのです。

【松田】

軍隊で働く看護師は、赤十字から派遣されて、最初は無料で奉仕活動という感じなのですが、その活動が認められて、結核がすごく流行ったとき、塹壕の中でも結核が流行って、それに対して看護師たちが活躍したということで看護師の仕事が認められていきます。そして、第一次世界大戦を契機に、看護師の免状がつけられ、それが国家資格になっていったと思います。

【渡邊】

ありがとうございます。個別の質問は以上で終わらせていただきまして、お二人に共通の質問が、シンプルな質問が二つと大きな質問が一つあります。まずシンプルな質問ですが、「お二人の講演を聞いて、結婚か仕事かという二者択一を迫られたという印象が残りました。結婚も仕事もというケースはなかったのか」という質問が来ています

ので、簡単にイエスかノーかでお答えください(笑)。具体的な細かいことはシンポジウムが終わってから個別に対応していただければと思います。

【松田】

それは、もちろん職種にもよります。たとえば郵便局で夫も妻も働いている場合には、妻でもあり、郵便局の職員でもあるというケースもあります。

教師も、けっこう教師同士で結婚することを勧められるのです。お見合いのように、教師の組合みたいところで、男性教師と女性教師が出会う場をつくったりするので、職種によっては二者択一になっていない場合もあると思います。

【松浦】

やはり職種によるかなと思いますが、看護師関係はかなりの激務だったので、地区看護師にしてもヘルス・ヴィジターにしても、基本的には独身でなければ務まらない職だったかなと思います。

ただ、看護師やヘルス・ヴィジターのまま仕事を続けていくと、将来、かなりの年齢になってから結婚している事例が見られます。小学校は、教員同士の結婚を勧められたり、ロンドンの小学校の女性教師の半分ぐらいは既婚者だったという説もあります。一方で、本学国際英語学科教授でスコットランド出身のアンガス・ノーマン先生は「スコットランドの田舎では二〇世紀後半でも女性教師は結婚したら退職しなければならなかった」という話をされていたので、制度的にはそ

ういう規範はなくなったとしても、社会的にはそういう規範があったかもしれません。

【松田】

フランスのほうが既婚女性が働く割合が多いとか、フランスの工場は小さな作業場のようなものが多かったので既婚女性が働きやすかったと言われています。

【渡邊】

シンプルな質問の二つめですが、もう時間がありませんので私が答えます(笑)。「裁縫の話が出ましたが、デザイナーになる人はいなかったのか」というご質問ですが、ココ・シャネルはその典型の人です。で、「いた」ということでご紹介させていただきます。

大きな質問で、「宗教と女性の社会進出、イギリスもフランスもともにキリスト教の国ですが、女性の社会進出にとってキリスト教なり宗教は、プラスの働きがあったのか、マイナスの働きがあったのか」というかたちでお答えいただければいいかと思います。フランスはカトリック、イギリスは国教会という違いがありますが。

【松田】

フランスの場合は、一九世紀後半に宗教と共和主義者の対立が激しかったという前提があります。修道女であっても職業としてというところとはあり得るのですが、修道女は奉仕活動が基本なので、プロフェッ

ションというのにはならないと思います。それが国家の公務員となったのですから、やはりそれからがプロフェッションになるのではないかと思います。

【松浦】

すごく難しい質問ですね。宗教が女性の社会進出にプラスに働くか。女性の社会進出や職業に対して、教会が明確に否定的なことを言ったのかについて知識がありません。でも、たとえばチャリティーなどの分野で、牧師と女性が競合関係にあり、牧師が「女性の分際で」というふうに言ったとか、いろんなことがあるので。すみません、すごく大きな質問なので、これからの宿題とさせていただきます。どう答えていいのか、ちょっとわからない。キリスト教の教義自体は、じつはわりと女性蔑視の内容を持っている宗教であると思いますので、否定的なのかな。渡邊先生はどう思われますか。

【渡邊】

私はフランスの事例しかわかりません。カトリックの場合は、松田先生がおっしゃったような制約のなかで動いていたのだろうと思います。

いろいろなご質問を出していただき、ありがとうございました。消化不良の面があったかと思いますが、ちょうど閉会の時刻になりました。きょうはフランスとイギリスに事例を採って、女性の社会進出を考えてまいりました。一八七〇年から一九一四年という時代に、共通

の課題がいろいろあったことが見えてきました。公衆衛生の話がありました。日本でも一九〇〇年代に衛生博覧会をあちこちでやるなど、衛生教育・啓蒙活動をやっていて、その辺りにも共通性が見られたかなと思います。

その共通の課題をどう乗り越えたのか、何が問題として残ったのか、というような点については今後、また女性歴史文化研究所で追究してみたいと思います。

きょうは長い時間、本当にありがとうございました。これで本日のシンポジウムを終わらせていただきます。（拍手）

（了）